

県内唯一の
総合健康支援機関として

「予防医学協会 ● 通史3」

県内最大の健診機関へ成長

「若手県民の健康と福祉に寄与すること」を理念として昭和45年に遠山病院の一角で産声を上げた協会は、のちにバブル経済と呼ばれる好景気がピークに達した平成2年に創立20周年を迎えた。この20年間の成長は目を見張るものがあり、地域保健、学校保健、産業保健、一人人間ドック、健康教育の五つを事業の柱として県民の全年齢層、全職域をカバーする保健システムの構築を目指し、職員の技術向上、健診機器の充実、設備の拡充に努めた。そして、世界に類をみない超高齢化社会に対応する国の施策や「活力とうるおいのある長寿社会いわて」を目標とする県民総参加の健康づくり、あるいは「精度の高い良質な健康診断、環境測定の実践」をモットーとする社団法人全国労働安全衛生団体連合会や財団法人予防医学事業中央会などの全国組織の活動と連



健康いわて第90号
(平成2年10月号)



創立20周年記念式典(平成2年10月1日)

携しながら県内唯一の総合健康支援機関へ発展した。

平成元年度の検診者総数は約83万人に達した。これは140万県民の約60%にあたり、当協会が県民の健康づくりに果たす役割と責任がますます大きくなった。

加藤十郎会長は、「県民の健康への関心と多様化するニーズを適切に把握し、学術的基盤に立脚した活動、そして、健康づくりまで含めた幅広い活動を21世紀に向けて推し進めていきたい」と、盛岡グランドホテルで開催された創立20周年記念式典(平成2年10月1日)で力強く抱負を述べた。

ここからだの健康づくり運動

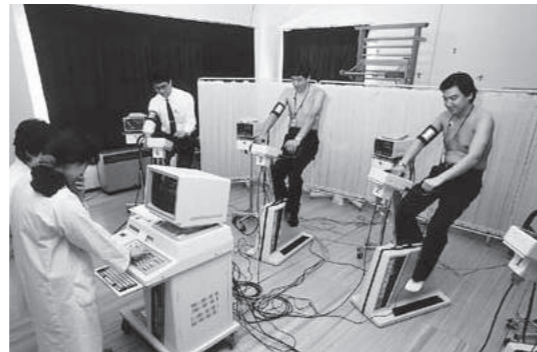
THP(トータル・ヘルス・プロモーションプラン)事業、すなわち「労働者のここからだの健康づくり運動」は、昭和63年の労働安全衛生法改正により新たに規定された健康増進対策の柱のひとつである。

これは、中央労働災害防止協会に登録した産業医、ヘルスケア・トレーナー、ヘルスケア・リーダー、産業栄養指導者、産業保健指導者、心理相談員の6種類のスタッフがチームをつくって実施することになっており、各職場の事業者がこれらのスタッフを揃えることが困難な場合、労働省の認定を受けたサービス機関に委託することとなる。

当協会では、このような要望に応えるため平成元年11月に東北では2番目の「健康増進サービス機関」



保健指導



自転車エルゴメーター導入

として認定を受けるとともに、2階検査室に労働省(現・厚生労働省)の助成制度を利用して自転車エルゴメーター等の器具を整備し、従来の体力測定機器と併せて準備をすすめ、平成2年2月、一関商工会議所の会員20事業所、約70名を皮切りにTHP事業を開始した。

自転車エルゴメーターでは、医師の監視の下に運動負荷中の心電図・血圧・脈拍数を測定。その結果をコンピュータに入力し、すべての測定終了後、医師の総合判定、ヘルスケア・トレーナーによる運動プログラム作成、ヘルスケア・リーダーによる運動指導、産業保健指導者による日常生活や必要な場合には産業栄養指導者や心理相談員による指導・相談が行なわれた。

この事業の効果は数年を待たないと現われてこないと言われ、各事業所へ宣伝と普及に努めた結果、平成3~5年度は年間1500人前後が利用した。しかし、事業開始直後にバブル経済が破綻し平成不況が始まると利用者が減少の一途をたどり平成11年に制度そのものが見直されることになった。

第2次コンピュータシステム稼働

各種の検診活動が大集団化・複雑化する中で検診システムのコンピュータ化は避けて通ることができない。当協会によるコンピュータ化への対応は、昭和55年の成人心電図自動解析装置の導入から始まり、59年に循環器系・多項目検診、婦人の健康診査、定期一般健康



診断などのバッチシステム（岩手電子計算センターに委託）を構築。61年にはオフコン（日立製 HITAC 170/45L）を導入して循環器系・多項目検診、一日人間ドックについて「検診会場・検査、結果作成」の工程がコンピュータ化された。また、63年に貧血検査（学童）、平成元年に学童成人病予防検診、そして経理部門のコンピュータ化を実現した。

その後、事業量が予想以上に増大したことやコンピュータの技術革新が急速に進んだことに対応して従来のシステム更新が必要となり、平成3年度を目的に第2次コンピュータシステムの構築が図られた。

これによって従来のシステムではコンピュータ化の対象としていなかった定期健診の全てと成人病検診の一部、いままで外注によるコンピュータ処理をしていた婦人の健康診査を当協会独自に処理し、検診件数が大巾に増加する時期でも結果の通知に遅れがでなくなった。また、外部委託で作成していた各種の統計の一覧表（例えば成績一覧表）や集計表（昨年度までの成績表）が内部で作成できるようになった。

田島所長が逝去

平成3年9月、類まれなるリーダーシップで当協会を県内唯一の総合健康支援機関へ育てた田島達郎専務理事兼県民保健センター所長が逝去し、後任に櫻井末男が就任した。

1990
▶99
Chronicle three
発展期

県内唯一の
総合健康支援機関として



第2次コンピュータシステム



健康いわて平成3年10月号より

県南センターを開設

工業団地の多い県南地域の事業所健診を充実させるための拠点として昭和61年県南支所が水沢市に開設された。県南支所は、着実に発展し、平成2年3月には施設を増築して利用者の利便性の向上に努めたが、施設の規模が小さく、県民のニーズの増大に対応できない状況となった。

当協会では、このような県南地域での活動に加えて一日人間ドックや様々な事業（THP・成人病健診・健康教育・各種講習会）を強気に展開するため平成3年度事業計画で県南地域の新しい拠点として「県南センター」を開設することを決定。候補地の選定や施設概要を検討した結果、金ケ崎町西根前野地区（国道4号線の西側）に建設用地を確保し、平成4年8月に着工した。

同センターは、敷地面積が1万3433㎡、鉄筋コンクリート2階造、延べ床面積約4165㎡、外壁は薄茶色で1階には事務室、検査室を中心に電算室、120名収容の多目的ホールなどを、2階にはドックフロア、成人病健診・THPフロアを中心とした検診スペースを配置した。

施設は平成5年10月に落成し、事業所健診を柱に業務を開始した。11月からは一日人間ドックを開始し、県南地域の健康づくりの中核施設として歩み始めた。

さんさ踊り職場対抗コンテストで グランプリを獲得

盛岡さんさ踊りは、8月2、3、4日の三日間（現在は1日から四日間）、盛岡市中央通の約1キロを舞台に、2万人の大群舞、4千人を超える日本の太鼓パレード等が祭り気分を盛り上げる。平成元年に初参加して以来、趣向を凝らし、チームワークを高めてきた当協会は、輪踊りやパレード、職場対抗コンテストなどに参加。エネルギーシユな太鼓、軽やかな笛、華麗な踊りを披露して沿道から盛んな拍手を浴びるようになった。

平成6年8月には最終日に県民会館で開催された「セキスイ盛岡さんさ踊り職場対抗コンテスト」に当協会オリジナルのさんさで登場し、その華麗さと優雅さで満員の観客を魅了。見事グランプリに輝いた。

平成7年も同様に喝采を浴び、2年連続でグランプリの栄冠を獲得した。



「セキスイ盛岡さんさ踊り職場対抗コンテスト」で2年連続グランプリ（平成7年）



ねんりんピック'91 開会式に先立って行われた「一鉢・花の祭典」での長島茂雄氏



県南支所（平成4年）



完成した県南センター



県南センター整備にかかわる記者会見（平成4年2月）

県医師会長石川育成が会長に就任

平成7年2月、加藤十郎郎会長が勇退し、県医師会長石川育成が会長に就任した。石川会長は、県医師会長の立場から、各地域で行われる各種検診が、バラバラでなく効率的に実施されることが、住民はもちろんのこと行政及び検診機関にとっても最善であろうと考えてきた。また、そのためには対ガン協会、結核予防会等とのつながりを一層強固なものにしていく必要があると考え、岩手県環境保健部と意見交換を重ねてきた。当協会と財団法人結核予防会岩手県支部との統合が実現するのは平成9年4月であるが、その道筋をつけたのは石川会長の功績である。

世界初CRシステム搭載検診車を装備

CRシステム（デジタルX線撮影・高分解能画像処理装置）は多くの医療機関に導入され稼働しているが、検診車に搭載して集団検診に使用するには装置の大きさ、画像に対する振動の影響などの問題で不可能とされてきた。この課題を解決する画期的な装置（FCR9501）が開発され、振動に耐えられるよう車載専用で改造して実施の段階となった。

当協会は、平成7年にCR検診システムの運営に関する諸問題を検討するために「CR検診システム整備検討委員会」を設立。委員長に松岡昭治先生、副委員長に岩

年5月には経理不祥事が発覚し、「まさか自分の職場でこのような事件が起きるとは」と驚くとともに、信頼回復のため危機感を持って事件事故の再発防止に向けた取り組みが行われた。

高橋牧之介会長就任

平成8年10月、石川育成会長を名誉会長に推戴し、高橋牧之介県医師会副会長が新しい会長に就任した。また、副会長2人制が初めて実現し、緒方剛岩手県環境保健部長と小林高盛岡市医師会長が就任した。

「協会開設から既に四半世紀の歳月を経て二十一世紀に突入しようとする今、高齢化社会の到来と共に県民の皆様健康志向は益々高まり多様化しつつあります。そのニーズに対応すべく、公共性を保ちながら学術的基盤を堅持しつつ事業を推進することは必ずしも容易な道ではないと考えます。それにつけても今後一層の関係各位からのご指導とご協力を得なければなりません」（健康いわて）平成8年10月号



健康いわて平成8年10月号より
高橋会長就任のご挨拶

Chronicle three
1990
▶99
発展期

県内唯一の
総合健康支援機関として

健康いわて平成7年3月号より
石川会長就任のご挨拶

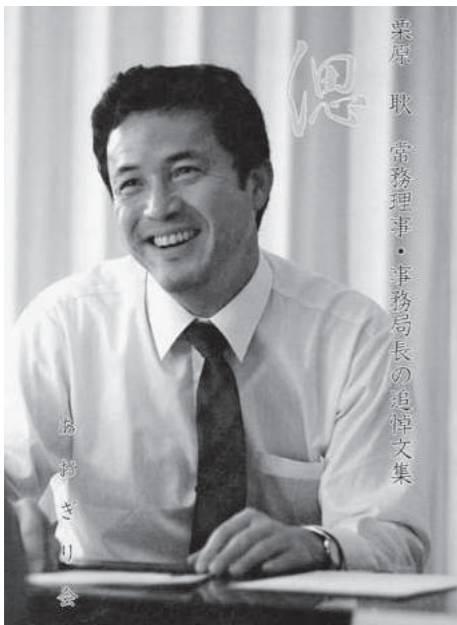


あおざり 31号



健康いわて第150号
(平成7年10月号)

「栗原常務理事・事務局長追悼文集 偲」
(あおざり会発行・平成11年1月)



栗原 常務理事・事務局長の追悼文集

手県立中央病院佐々木康夫中央放射線部長、委員として岩手県立中央病院武内健一呼吸器科長、当協会田澤稔呼吸器科部長を選任し、当協会が事務局を担当することになった。

同委員会（毎月1度開催）に平行して検診車の整備も行われ、2度、3度と図面に手直しを加え、平成8年4月に完成、納車となった。その後、完成した検診車で高速度路や一般道を走行して、路面より受ける衝撃、振動を測定し、走行後の装置の立ち上げ、画像表示、ユニットのズレ等を確認した。さらに、検診時を想定して停車中のドアの開閉、ステップの乗降など各種振動を測定し、画像の読取り、転送に支障がないことを確かめた。

同年6月7日、国立がんセンター名誉総長の杉村隆先生のご臨席をいただき、富士メディカルシステム高野正雄取締役、岩手県医療局吉田敏彦局長、石川育成会長等がテープカットを行い、世界初のCR検診車（あおざり31号）が動き出した。

25年目の蹉跌

「万里の長江も時には湾曲し、流れを変える。道、遠ければ又、行く道に屈曲あらん。協会の将来も亦、必ずしも平坦、無事を望みたい」

これは、当協会再興の祖といわれる佐々木一夫会長が創立10周年に語った言葉であるが、創立25周年を迎えた平成7年9月、交通死亡事故が発生した。また、平成8

高橋会長は、両副会長とトロイカ方式で業務に当たることになり、就任に当たって以上のように控えめな挨拶を行ったが、この後今日まで10年以上の長きにわたって会長を務め、当協会の発展に情熱を傾けている。

栗原常務の協会葬

当協会の真の創始者と言われ、「それまでほとんどの職員が協会というよりも栗原常務個人の人間性に魅力を感じ信頼してきた」（十和田紳一「30年のあゆみ」、『創立30周年記念誌』所収）と語られる栗原常務理事兼事務局局長が平成9年1月12日逝去した。56歳の若さであった。

当協会では故人の業績を称えるため2月10日、盛岡グランドホテルにおいて協会葬を執り行い、葬儀委員長の高橋会長が、「局長は協会にとって最大の支柱であったばかりでなく、岩手県民にとっても不可欠の存在でした。突然のお別れになりましたことはかえすがえすも残念でなりません」と式辞を述べ、全国各地から駆けつけた多数の方々とともに故人に別れを告げた。

告別式に引き続き偲ぶ会が行われ、野球のユニフォーム姿で手を振る遺影と共にみんなで盃を酌み交わした。

結核予防会岩手支部と統合

平成9年4月1日、当協会と財団法人結核予防会岩手県支部との統合が実現した。同支部は、昭和18年8月23日、結核予防会の指導下、県が主体となり設立され、長年にわたり結核予防の教育広報活動、結核検診、複十字シール運動などの事業を推進してきた団体で、平成7年度は15万3870人の結核検診を実施した。

平成9年の世界結核デー（3月24日）において当協会が所有するCR検診車あおぎり31号が東京都結核予防協会の要請を受けて都内6ヶ所でキャンペーンに参加し、「その場で撮影、その場で判定」という画期的な街頭検診を上演した。

その二日後、同年3月26日、(財)結核予防会岩手県支部・緒方剛副支部長と当協会・高橋牧之介会長が岩手県庁環境保健部長室において「統合に関する覚書」に押印して統合が実現した。

これによって、これまで県の所管下に進められてきた結核検診と結核についての住民教育、研修等を含む結核



健康いわて平成9年4月号

乳房X線検診車

乳がん検診は、昭和62年に老人保健法として追加され、医師による視触診を標準方式として行われてきたが、当協会では平成10年4月に乳房X線撮影（マンモグラフィ）を導入した。乳房X線撮影は、微小石灰化像や病変を見つけたことができ、より初期の段階で乳がんを発見することができ、欧米では早くからこの方法による乳がん検診が行われてきた。

またこの頃、一部でがん検診の効果への疑問がとり沙汰されたため、正しい知識を普及するべく「マンモグラフィ」を導入した乳がん検診（東北大学医学部外科学第二講座講師大内憲明）並びに「対がん予防戦略」がん集団検診の結果（岩手医科大学衛生学公衆衛生学講座教授角田文男）をテーマに学術講演会（於・ホテルカーリナ）を開催した。

この翌年、平成11年4月、岩手県医師国民健康保険組合（工藤次郎理事長）からCRシステム（コンピュータ）を利用したデジタルX線画像診断装置を搭載した乳房X線検診車を貸与していただき「乳房X線検診車（あおぎり60号）」を整備した。

CRシステムは振動や温度差に弱いなどの理由で検診車に搭載することは技術上不可能とされてきたが、当協会は平成8年に世界で初めてCRシステムを搭載した胸部検診車を実用化し、肺がん検診において、その精度の高さを証明してきた。



乳房X線検診車（あおぎり60号）



結核予防キャンペーン 2002

1990
▶99
Chronicle three
発展期
県内唯一の
総合健康支援機関として

予防活動を当協会が引き継ぐことになり、当協会は名実ともに県内唯一の総合健康支援機関となった。

初の結核予防街頭キャンペーン

結核は過去の病気ではない。世界的にも再流行のきざしを見せており、WHO（世界保健機関）は1993年に「結核非常事態宣言」を発表したが、結核の勢いはいまだに衰えていない。日本でも6万人以上が治療を必要として、そのうち毎年3千人以上が亡くなっている。

当協会は、結核予防週間（9月24日～30日）にあわせて、平成9年9月27日、結核予防会岩手支部としては初めての街頭キャンペーンを盛岡市菜園の川徳パート前で実施した。

当日は、県保健福祉部保健衛生課ならびに県地域婦人団体連絡協議会の方々の協力を得て、CR検診車あおぎり31号による無料結核検診、血圧測定、複十字シール運動募金などを行い、結核予防の大切さを訴えた。無料結核検診の読影では県医療局の松岡昭治画像診断室長と県立中央病院の佐々木康夫中央放射線部長があたり、受診者一人一人に結果を説明した。

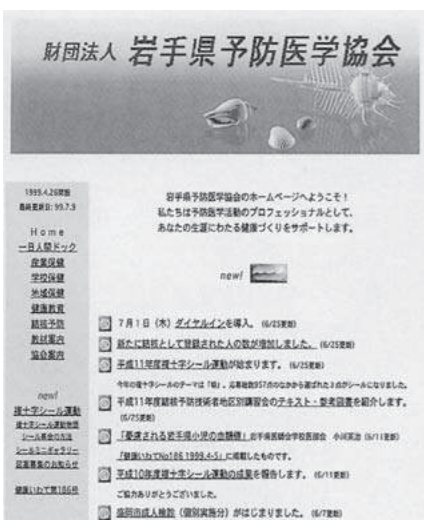
これ以後、結核予防街頭キャンペーンは毎年恒例の行事となった。

この実績にもとづいて導入した乳房X線検診車は、より微小な初期がんの発見を可能にするとともに、被爆線の低減、コンピュータ処理による高精度な診断画像の提供、画像情報の保存検索など長期の健康管理を可能にした。

HP開設

ウィンドウズ95の登場によってパソコンやインターネットが急速に普及する中、当協会は地元プロバイダー（株）エクナによりホームページの作成に着手し、「県民の生涯にわたる健康づくりを支援したい」という思いを込めて平成11年4月「岩手県予防医学協会ホームページ」を開設した。

これによって当協会の理念や事業の概要をお知らせすると同時に、さまざまな情報をリアルタイムにお届けすることができるようになった。



ホームページ開設（平成11年4月）

Human 4 人物伝 Portrait

協会の 真の 創始者



栗原 耿

Ko Kurihara
[1941-1997]

初代常務理事兼
事務局長

「これから予防医学の時代がくる」と昭和40年代から熱っぽく語り、遠山理事長の心をつかみ、県内各界のトップを動かして協会の創立をリードした。また、昭和53年の組織改革に当たっては「決して一回も表面に出なかったが、協会と県医師会との連携劇の真の脚本家」（田島専務）と言われ、「その舞台廻しは大胆な発想力と緻密な企画力があふれ、絶えず夢に人生に賭け続ける男」（同）であったと言われる。

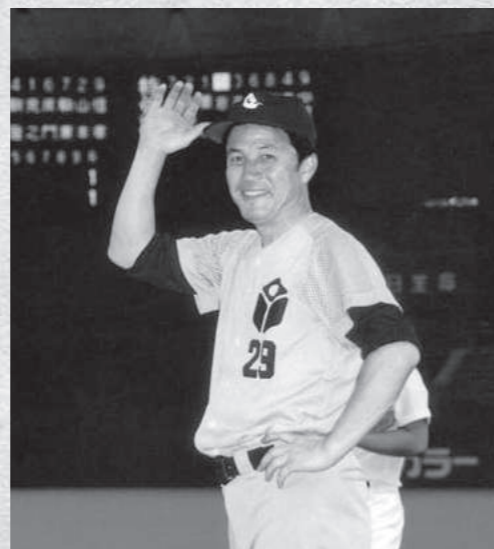
栗原耿は、まさに誰からも愛され、信頼される事務局長であり、「夢は一人でみるよりも皆と一緒にでっかいのを見たほうが何倍も素晴らしい」と、たくさんの人に夢を植えた予防医学の伝道者でもあった。

彼が生まれたのは、太平洋戦争が始まる一ヶ月前、場所は中国大陸の満州国。昭和39年に岩手大学獣医学部を卒業し、翌年4月遠山病院検査課へ入った。目鼻立ちの整い、笑顔の素敵な好青年、しかも生まれは満州国。彼が語る予防医学への夢に遠山理事長が心を揺さぶられたことは想像にたたくない。

「人間『同士』と呼べる人は少ないのですが、私は栗さんのことを『我が同士』という思いで付き合っていました。私のしたいことをいつもしてくれるので、本当に私の代行者でもあり、感謝一杯の気持ちでございます」と、遠山理事長は語っている。

協会発足以降、常務理事として26年余にわたって中心的な役割を果たすとともに、予防医学事業中央会においても理事として企画部門の発展にリーダーシップを発揮し、全国労働衛生団体連合会、愛の健康づくり財団などでも理事を務め、平成8年10月厚生大臣表彰を受けた。が、その翌年、平成9年1月に不帰の客となった。

栗さんの夢と笑顔は、協会の永遠の財産である。



Human 3 人物伝 Portrait

協会発展の 功労者



田島達郎

Tatsuro Tajima
[1931-1991]

初代専務理事・
県民保健センター所長

新しい船には新しい水夫がいる。協会が県医師会主導型で再スタートした時、佐々木会長の強い意向を受けて協会の事業全体の統括者として専務理事・県民保健センター所長に就任したのが、県医師会常任理事で県立中央病院の要職にあった田島達郎である。

「生まれた年は満州事変勃発の年、昭和6年。誕生日は1月7日、尾崎紅葉の金色夜叉で有名な貫一、お宮の熱海の海岸シーンのその日です……来年の今月今夜この月をきっと僕の涙で曇らせてみせる」と、協会に着任した田島専務は、平均年齢26歳の若い職員たちを和ませるため、あえて新派調のせりふで自己紹介した。

遠山病院の中で生まれ育った協会が、時代の潮流に合わせて変化し発展してゆくためには、県医師会主導型へ抜本的な組織改革を行うことが必要で、同時に職員の意識や技術をレベルアップすることが求められた。が、職員の気持を束ねるのは一朝一夕にできるものではない。

田島専務は、「赴任が近づくにつれ、長年勤務した中央病院に対する惜別の情と、一方、敵陣に切り込むような悲壮感が交錯してきた」と言う。そして、「運命は天から与えられるのではなく、自分で創るものである」という佐々木理事長の言葉が自分を励ましてくれたと言う。

このような人情味あふれる人柄が、職員の心をつかんだ。また、学問を愛し、「職員の研究成果は協会の宝である」という信念で、学問をする職員を応援し、職員研修の強化と検査設備の拡充を積極的に推進した。

その仕事ぶりは「エンジン全開のブルドーザーのごとくであり、我々職員はいつも轍を飛ばされた」（元検診部長・川村和子）という。

田島専務は、協会の再出発、そして高度経済成長時代を引っ張った恩人である。



平成元年8月さんざ踊りにて



2009

創立半世紀へ向けた 取り組み

「予防医学協会 ● 通史4」

創立30周年記念「寂聴講話」

昭和45年に数名の職員で寄生虫卵検査を中心にした簡易検査からスタートした当協会は、創立30周年を迎えた平成12年度、職員数302名のマンモス事業体に発展し、人間ドックや生活習慣病健診等を含む各種検査健診112万件、事後指導会・講演会等への講師派遣約1000回という全国有数の総合健康支援機関となった。

この発展の原動力は、予防医学事業に情熱を傾けた先人たちのパイオニア精神と一丸となって日夜精進を重ねた職員の熱意、そして関係機関をはじめ県民各位のご支援である。

当協会では、この記念すべき年に長年にわたって励ましをいただいた多くの方々に感謝の意を表すことはできないかと考え、記念式典は行わず、国民的な作家

46年に県内初の検診車による循環器系検診を開始して以来、各種の団体より補助、助成をいただきながらその時々最新の機器を搭載した検診車を整備し、長年にわたり検診車による巡回健康診断事業を積極的に推進してきた。

特に地域保健分野においては、県下市町村の委託を受け、循環器系疾患予防の一環としての循環器系検診に力を注いできた。平成11年度の地域保健分野における循環器系検診は、49市町村の委託により実施。受診者数は10万人を超える実績があり、平成12年度は、財団法人日本宝くじ協会より循環器検診車「宝くじ号（あおぎり18号）」を寄贈していただいた。

この循環器検診車には心電計、眼底カメラ、血圧計が各2台の他、ノートパソコン、デジタル精密体重計、伸縮式ハンドル身長計などが搭載されている。事業費の総額はおよそ3400万円、9月25日、財団法人日本宝くじ協会大倉邦明事務局次長から当会に贈呈状が授与された後、テープカット、車両公開が行われた。

また、その二日後、身障者対応胸部検診車「けいりん号（あおぎり39号）」の完成伝達式が東京のホテルニューオータニで行われ、財団法人結核予防会総裁秋篠宮妃殿下より鍵を授かり、受配支部を代表して岩手県支部副支部長小山田恵（当会専務理事）が謝辞を述べた。

胸部検診車「けいりん号」は、昭和33年以来、日本自転車振興会の援助により製作され、財団法人結核予防会本部及び支部に配置され、多大な成果を収めてき

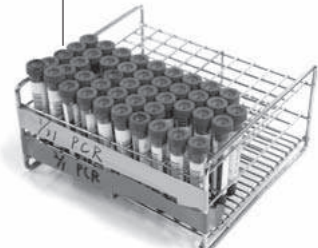


健康いわて創立30周年記念
「寂聴講話」案内
(健康いわて平成12年6・7月号)



身障者対応胸部検診車「けいりん号（あおぎり39号）」

循環器検診車「宝くじ号（あおぎり18号）」



で天台寺住職の瀬戸内寂聴さんによる記念講話を企画し、平成12年9月27日、岩手県民会館で「寂聴講話」を開催することとなった。

その反響は大きく、当初予定した一般招待者1200名をはるかに超える応募者があり、当日は開演前から入場を待つ人々がロビーにあふれた。

基本的に講演をお受けにならないという寂聴さんの講話が実現したのは、当協会の産みの親である遠山美知（当時顧問、遠山病院理事長）との親交があったからで、寂聴さんは、まず遠山とのエピソードから話を始めた。身近な話題をユーモアたっぷりに語りかける寂聴さんの講話に満員の聴衆は時折笑い声を響かせながら熱心に耳を傾けた。

誰もが自分を見つめ直し、心のよりどころを得たような、そんな講演会であった。

身障者対応胸部検診車・循環器検診車を整備

四国四県に匹敵する広大な岩手県をくまなくカバーする機動力を維持し、県民の期待にこたえるためには、検診車の定期的更新が不可欠である。当協会は、昭和

た。その総配車台数は、平成12年9月現在751台で、そのうち262台が全国で稼働し、結核対策の第一線で活躍している。

今回の身障者対応胸部検診車は、2種類の胸部撮影機器が搭載されており、車椅子やストレッチャーのまま乗車し、そのまま胸部写真を撮ることができるようになった。

イメージキャラクター「FIT & PEP」

平成13年11月、当協会の活動をより身近に感じてもらうために、創立30周年を記念してイメージキャラクター「FIT & PEP」を制作した。FITは笑顔すこやか「フィットちゃん」、PEPは元気はつらつ「ペップくん」ともに生命力豊かなあおぎりの若葉をイメージし、県民一人ひとりが健やかに元気いっぱいすくすく育つことを願った。

新しいキャラクターを紹介します



創立30周年記念
イメージキャラクター「FIT & PEP」



健康いわて第201号
(平成13年10・11月号)

また、当協会のロゴマークもより親しみやすくするためにひらがなを用いて「あなたと共に健康づくりよぼういかに協会」とした。これにあわせて広報誌『健康いわて』もVol.201(平成13年11月発行)からリニューアルされた。

人間ドックセンター落成

世界初のシースルーMRI室など先端技術を取り入れた人間ドックセンターが平成16年4月21日に落成した。場所は、盛岡市永井の従来の施設の南側で、延床面積約2724平方メートル、鉄筋コンクリート3階建ての人間ドック専用施設である。

1階は広々としたエントランスホール、受付・総合案内、レディースドックフロア、ウエルネスルーム「気



完成した人間ドックセンター(平成16年5月)



トレーニング室「気良楽(きらら)」



世界初のシースルーMRI室



1階女性専用レディースドックフロア



2階検査フロア

2000
▶09
Chronicle four
展開期

創立半世紀へ向けた
取り組み

良楽(きらら)」、2階は一日人間ドック、シニアドックの各種検査フロア、3階は診察室、相談コーナー、食堂などがレイアウトされている。これまでの一日人間ドックに、より高度な診断技術を導入した専門ドック、女性専用レディースドックを加えた充実のラインナップで県民の健康づくりをサポートする。

なかでも注目を集めているのは、2階専門ドック脳コースのMRI室で、世界で初めてシースルー工法が採用された。これまでのMRIは磁気を封じ込めるために特殊な金属板で部屋の周りを囲み、小さな監視窓



しかない密閉された空間であった。そのため多くの受診者から心理的な圧迫感や閉塞感を受けるとい声も寄せられていた。

今回のシースルーMRI室は、2枚の電波シールドガラスを使ってまったく新しい方法で磁気と電波を遮断し、明るく開放的な設備となった(鹿島建設が開発)。受診者と検査スタッフがお互いによく見えるという環境での検査は、両者にとって安心と安全が確保され、極めて快適なスペースであると好評を博している。

健康けんき倶楽部開設

生活習慣病の発症予防、健康維持増進に向けた健康づくりを支援する会員制のヘルスサポートシステムとして「健康けんき倶楽部」が平成18年度からスタートした。当協会の健康診断を受診した人なら誰でも入会できる。

保健師・管理栄養士・健康運動指導士などの専門スタッフが一人ひとりに合わせた健康プランを作成し、食事や運動などさまざまな面から毎日の健康づくりをきめ細かに支援する。また、「困った」「悩みなあ」というときにはいつでもフリーダイヤルで電話相談することができるとは、年4回の健康レターで、具体的な取り組みを支援する。

年1回の健康評価は、血圧・問診、体組成量(体重・部位別体脂肪・部位別筋肉量・BMI・基礎代謝量)、

内臓脂肪量（CT検査）、血液検査などを行い、通常の健康診断では見ることのできない内臓の脂肪をCT検査で確認できるほか、全身の体脂肪率だけでなく、足腕、体幹部など部分ごとの脂肪量、筋肉量もチェックすることもできる。

さらにオプションとして、トレーニング室「気良楽（きらら）」を会員料金で利用し、筋力トレーニングマシン、エアロバイクなどのトレーニングマシンを使った運動を行うこともできる。

禁煙外来がスタート

喫煙を単なる嗜好や習慣ではなくニコチン依存症という病気として必要な治療を行うという考えに基づき、平成18年4月から健康保険を使った禁煙治療ができるようになった。これを受けて当協会は、タバコをやめたい方々を対象として禁煙外来を始めた。

ニコチン依存症の方がタバコを急にやめると血液中のニコチン濃度が減少し、集中力の低下、不安、不眠などのニコチン離脱症状があらわれる。この症状は通常3日以内にピークを迎え、おおむね1週間、長くても2〜3週間で消える。が、ニコチン離脱症状と戦いながら自分の力だけで禁煙できる確率は1割程度といわれている。

禁煙外来では診察、呼気一酸化炭素濃度の測定を行い、医療品のニコチンパッチを使用して禁煙に向けた

がある。

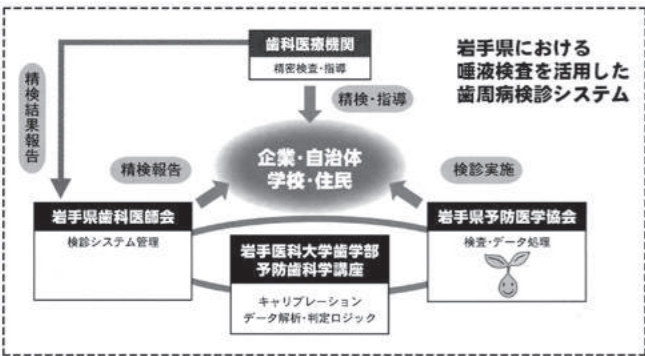
本システムの構築にあたっては、岩手県歯科医師会がシステム全体の管理と受診者の事後措置について、岩手医科大学歯学部予防歯科学講座は判定ロジックの構築など学術面を担当、当協会は検診の実施と検査精度の管理をそれぞれ担当し、3者の連携により実施が可能となった。

そして、平成17年度から県内において集団を対象として、唾液検査に問診項目を加えた岩手県独自の「歯周病唾液検診」をスタートさせた。

このような実績が高い評価を受け、平成20年度予防医学事業中央会学術賞（児玉賞）を受賞した。



健康いわて平成19年10・11月号より



平成20年度予防医学事業中央会学術賞（児玉賞）を受賞した「岩手県における歯周病唾液検診システムについて」



平成18年世界禁煙デーポスター

2000
▶09
Chronicle four
展開期

創立半世紀へ向けた
取り組み

治療を行う。ニコチンパッチは、ニコチンを皮膚から吸収させることで、禁煙時のニコチン離脱状況（タバコが吸いたい・イライラするなど）を和らげ、楽に禁煙できるようにする禁煙補助薬である。平均的な治療では3ヵ月（12週）を禁煙達成のめどとし計5回来院していただく。

また、専門スタッフが医薬品を使わず「タバコを卒業＝卒業」に向けて支援する一日人間ドック「卒業サポート」も平成18年度からスタートした。

歯周病唾液検診システムが児玉賞受賞

歯周病は、大人になって歯を失う原因の第一であり、早期発見・早期治療が不可欠といわれ、老人保健法の総合健康診査において40歳・50歳の節目年齢に「歯周疾患検診」を行ってきたが、平成16年度より介護予防の観点から対象年齢に60歳・70歳も加えられた。

当協会は、平成9年に岩手県歯科医師会が実施した「8020データバンク構築事業」への参加を機に歯科医師会との連携を深めており、平成16年度のトライアルを足がかりに、従来の歯科医師による歯周疾患検診に代わるものとして、唾液による歯周疾患スクリーニング法を開発・導入した。唾液による検査は簡便・非侵襲的であることから受診者にとってメリットがあるほか、健診機関にとっても、新たな設備投資が不要で現在使用している検査機器で対応可能というメリット

人間ドック・健診施設機能評価認定

「人間ドック・健診施設機能評価」は、人間ドックを受診者に、安心して質の高い検査を受けてもらうことを目的として、日本人間ドック学会が実施している機能評価制度である。

審査は4領域184項目（平成20年9月現在）について書面と実地調査により行われ、内容は運営体制をはじめ、受診者に満足と安心を与えるための工夫、検診の精度管理など多岐にわたり、一定水準以上で認定施設として承認される。

当協会の人間ドックは、昭和55年の開始以来、多くの人たちの好評を得て、平成19年度は受診者が年間1万8千人を超えるまでになった。専門施設としての充実した設備とスタッフの接遇は多くの受診者からお褒めの言葉をいただいている。

設備とサービスの両面から厳正な審査が行われ、平成20年7月26日、日本人間ドック学会より「人間ドック・健診施設機能評価認定」を受けた。



人間ドック・健診施設機能評価認定証

特定健康診査・特定保健指導

高齢者医療確保法による新しい健診制度「特定健康診査・特定保健指導」が平成20年4月から導入された。この制度は、老人保健法（昭和57年度施行）による基本健康診査に変わるもので、メタボリックシンドロームの判定を行う「特定健康診査」を実施し、その結果に基づいた階層化によって、内臓脂肪型肥満の解消に向けて「特定保健指導」を行うこととなった。

これによって実施者である保険者は、事業の評価として従来からのプロセス評価、アウトプット評価に加えて、糖尿病等の有病者や予備群を一定の目標まで削減するというアウトカム評価も求められ、多くの健康情報を細かく分析することが必要となった。

①メタボ改善に向けて

特定保健指導は、メタボリックシンドローム（内臓脂肪症候群）のリスクが高い方を対象として行われる。まず特定健康診査の結果に応じて、受診者全員を対象に健康づくりに関するワンポイントアドバイスを行う（「情報提供」）。ついでリスクに応じて、「動機付け支援」または「積極的支援」の2つのグループに分けて保健指導を行う。

②動機付け支援

主にメタボリックシンドローム予備群と判定された方を対象として、初回面接をひとり30分ほど行い、生活習慣の改善に向けて、改善目標と行動計画を立て、6カ

第53回予防医学事業推進全国大会

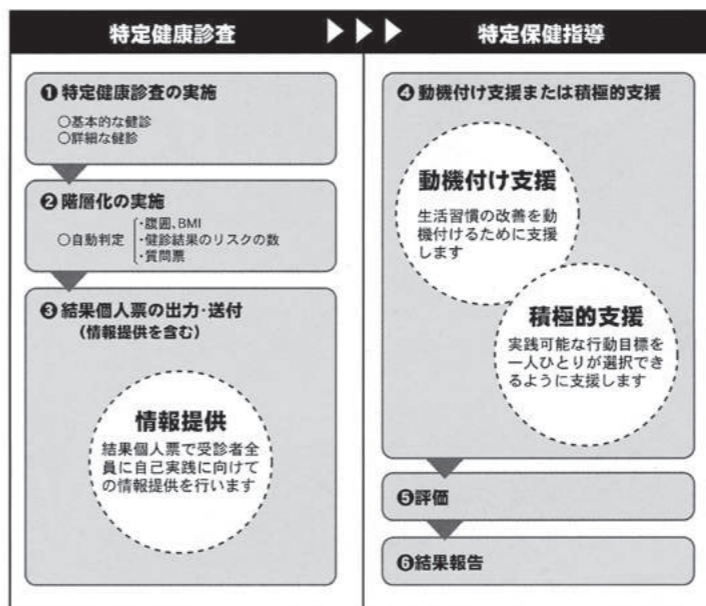
健康で明るく元気に生活できる社会の実現を目指し、「ほんとうの幸せを求めて―イーハトーヴの大地から贈る健康のメッセージ―」をテーマに、第53回予防医学事業推進全国大会（主催：財団法人予防医学事業中央会、財団法人日本寄生虫予防会、財団法人岩手県予防医学協会）が、平成20年10月17日、盛岡市民文化会館大ホールで開催された。

この大会は、予防医学事業の普及啓発を行うことを目的として、財団法人予防医学事業中央会の全国35支部が毎年持ち回りで開催しているもので、岩手県では昭和58年8月以来2度目。

今大会の式典では当協会会長の高橋牧之介に感謝状、同じく医療技術部長の川村和子に中央会賞（小宮記念賞）が予防医学事業中央会の大谷藤郎理事長より授与された。また、支部の中堅職員を対象とする奨励賞ではシ



特定健康審査システムから特定保健指導までの流れ



2000
▶09
Chronicle four
展開期
創立半世紀へ向けた
取り組み

月後に目標をどれだけ達成することができたか評価を行う。

③積極的支援

主にメタボリックシンドロームと判定された方を対象として、生活習慣の改善に向けて6ヵ月間にわたり継続的に支援する。支援内容（面接の回数、支援電話・レターの回数）と支援形式（個別またはグループ）によって3つのコースから選んでいただき6ヵ月後に評価を行う。

④オプションも充実

当協会では、動機付け支援、積極的支援に加えて「CT検査による内臓脂肪量測定」等のオプション検査や「運動施設利用（トレーニング機器）」、「栄養教室、運動教室の開催」など総合健診機関としてのメリットを生かした効果的な保健指導プログラムを用意し、一人ひとりに合ったきめ細かい保健指導を実施している。



第53回予防医学事業推進全国大会（平成20年10月19日）

システム開発課長の武蔵寛が、受賞した人たちを代表して表彰状を受け取った。

講演は午前中が学術講演、午後が文化講演で、岩手医科大学学長の小川彰先生による「脳卒中の予防と治療―癌、心臓病だけではない 脳卒中こそ諸悪の根源―」と、中尊寺仏教文化研究所長の佐々木邦邦先生による「みちのくの浄土―奥州藤原三代の信の風光―」が行われた。また、午後の部の初めにアトラクションとして遠野の語り部・正部家ミヤさんによる昔話があり、約1300人の参加者が興味深く耳を傾けた。

新健診システム「カルナス」

当協会が本格的にコンピュータ・システムを導入したのは昭和61年度で、その後もシステムの更新を重ねてきたが、21世紀に入ってX線装置をはじめとする画像系のデジタル化が進み、当協会においても人間ドックはもちろんのこと、本所・県南センターにおける健診はすべてデジタル化された。

一方、健康診断を取りまく環境は大きく変化してきた。長年続いてきた老人保健法の基本健康診査が高齢者医療確保法による特定健康診査に変わり、実施者である保険者は、事業の評価として従来からのプロセス評価、アウトプット評価に加えて、糖尿病等の有病者や予備群を一定の目標まで削減するというアウトカム評価も求められた。また、個人情報保護の観点から高度なセキュリティ

を通じた健康管理を支援する環境の構築に大きく近づいた。

時代は今、「治療」から「予防」へ

IT革命による情報の迅速化、システム化は健診事業に大きな影響をもたらしている。また、ヒトゲノムの解読が今後の医学医療に大変革をもたらすことは明らかで、個別の遺伝子診断が予防医学の分野に導入されるのもそう遠いことではなく、健診事業はさらに大きな変革を余儀なくされるものと推測される。

こうした時代の変化に対応し、かつ創業の精神に沿った健全な運営を維持し発展させていくには、中長期的展望に立った事業の明確なガイドライン策定が不可欠であり、当協会は事業推進検討委員会、経営改善検討委員会などを設置し、この課題について議論を重ねてきた。

そして、これら委員会の答申に基づき、レイダースドック、心臓ドック、脳ドックなどといったよりきめ細やかな人間ドックを開発推進してきた。同時に、新しい制度や需要に対応する施設や検診車の更新、新しい健診システムの構築などに取り組んできた。

時代は今、まさに「治療」から「予防」へと変わりつつあり、発病前の予防はもちろんのこと発病後においても治療一辺倒ではなく再発防止など発病後の予防が求められている。平成22年10月、当協会は創立40周年を迎えたが、「予防に勝る治療なし」という原点は、40年とい

2000
▶09
Chronicle four
展開期
創立半世紀へ向けた
取り組み



AED 贈呈式 (平成 21 年 3 月 26 日)

も求められた。

これらの状況を踏まえ、「検査データの運用」「健診結果の分析能力」「情報のセキュリティ」「デジタル機器の有効活用」をキーワードとして検討した結果、現行のシステム（平成7年度に構築）を拡張するだけでは複雑化した業務の遂行に対応できないとの結論に達した。

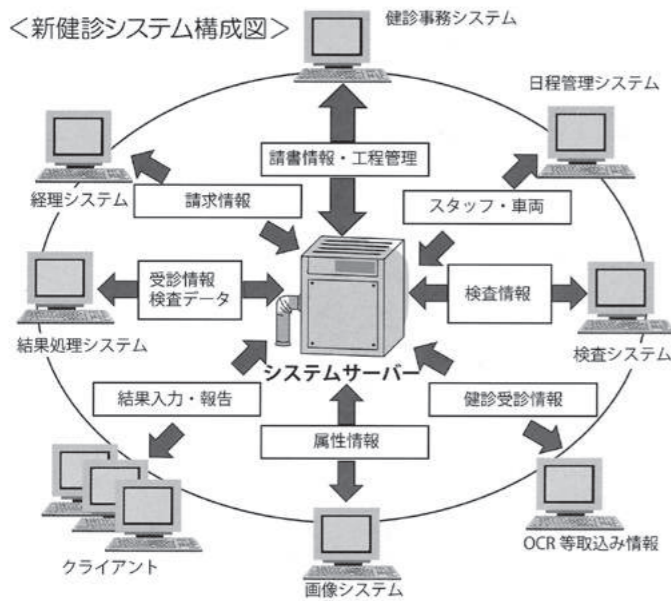
そこで平成19年7月に「健診システム検討委員会」を設置し、各部署の業務把握・組織編成・デジタル検査機器の設置計画について話し合うとともに、関連業種の優良事例を分析し取り入れた。平成20年6月には同委員会を「健診システム委員会」に変更、各分野別のプロジェクトリーダーを編成して新たな健診システムの開発に着手した。

こうして平成22年度から稼動することになったのが予約から結果処理までを一連のデータで管理する新健診システム「カルナス」である。これによって各部署（企画・健診・検査・結果処理・請求・追跡）は、電子化された請求情報をもとに結果処理を行うことが可能になった。また、健診現場では健診者IDと採血管固有のバーコードを採血時に直接結びつけ、採血トラブル防止に向けて精度の向上を図った。さらに、健診者IDをキー情報として計測情報や受診者情報をオンラインで取得することができ、本所、県南センター、一日人間ドック、施設内健診、巡回健診を区別することなく、過去画像との比較読影が可能となった。

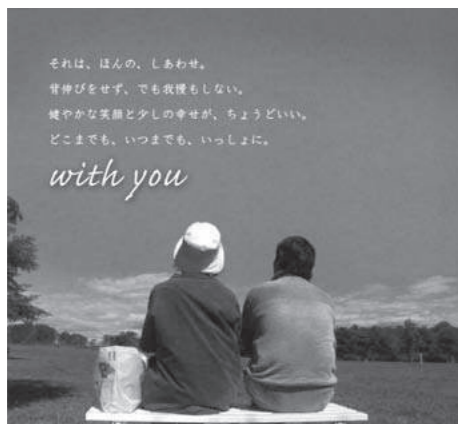
新健診システム「カルナス」によって、受診者の生涯

う歳月をかけてようやく国民の共通認識になったと言ってもよい。

協会は今後も、各種検査検診、環境調査、健康教育活動などを通じ、子どもからお年寄りまで一人ひとりのライフステージやライフスタイルに即して生涯にわたる総合的な健康づくりをサポートし、「県民の健康と福祉に寄与する」という基本理念の実現に向かって前進を続ける。



新健診システム構成図 (健康いわて平成 22 年 2・3 月号)



当協会のテレビコマーシャル

輝かしい受賞の記録

県民の健やかな笑顔のために、健康診断や人間ドックなど「予防医学」に重点をおいた健康づくりを推進してきた当協会は、40年のあゆみの中で数々の栄誉を受賞した。

協会としては昭和54年12月2日(社)全国労働衛生団体連合会より感謝状を皮切りに以下の表彰を受けた。

日本公衆衛生協会会長賞 (昭和57年9月11日)
公衆衛生事業功労者厚生大臣表彰

(昭和63年11月2日)

(社)日本作業環境測定協会感謝状 (平成8年5月)
その他、**(社)日本作業環境測定協会精度管理優良賞**を平成14年以降5回受賞している。

役員では以下の方々が必要ならびに数々の栄誉に輝いた。

(1) 勲五等双光旭日章

会長 八木義郎 (昭和60年11月3日)

会長 加藤十郎 (平成5年4月29日)

会長 高橋牧之介 (平成22年11月3日)

(2) 日本医師会最高有功賞

専務理事・所長 田島達郎 (昭和60年11月1日)

(3) 厚生労働大臣 (厚生大臣) 表彰

専務理事・所長 田島達郎 (昭和61年5月28日)

専務理事 櫻井末男 (平成6年10月)

常務理事・事務局長 栗原耿 (平成8年10月31日)

理事・事務局長 十和田紳一 (平成17年10月21日)

(4) 文部大臣表彰

専務理事 櫻井末男 (平成6年10月)

(5) (財) 予防医学事業中央会感謝状

顧問・元会長 遠山美知 (昭和58年8月25日)

会長 高橋牧之介 (平成20年10月17日)

(6) (財) 予防医学事業中央会賞 (小宮記念賞)

常務理事・事務局長 栗原耿 (昭和58年8月25日)

理事・総務部長 十和田紳一 (平成15年10月24日)

(7) 県勢功労者表彰

会長 加藤十郎 (平成5年5月)

(8) 岩手県労働災害防止団体連絡協議会長賞 (功績賞)

常任理事・事務局長 栗原耿 (昭和56年10月10日)

(9) 保健医療功労者岩手県知事表彰

副会長 加藤十郎 (昭和61年10月15日)

専務理事 櫻井末男 (平成6年10月)

職員の受賞も学術研究や予防医学事業への貢献によって数々の栄誉を受賞した。

(1) 厚生大臣表彰

看護課長 氏家トク (平成3年5月22日)

(2) (財) 予防医学事業中央会学術賞 (児玉賞)

小山富子、川口和子、川村和子、金野仁 (昭和55年9月4日)

斗成陽子・千田美智代・小山富子・小山田恵 (平成14年1月23日)

高島研二・瀧音守・加藤紳一・鎌田政夫・松尾洋一 (平成21年2月27日)

(3) (財) 予防医学事業中央会賞 (小宮記念賞)

医療技術部長 川村和子 (平成20年10月17日)

(4) 保健医療功労者岩手県知事表彰

看護課長 吉田ミチ (昭和61年10月15日)

放射線課長 乳井博保 (同右)

看護課長 氏家トク (平成元年10月13日、平成3年5月)

その他、(財) 予防医学事業中央会奨励賞、(社) 全国労働衛生団体連合会功績賞・奨励賞、全国IH P推進協議会表彰、アジア予防歯科学会賞などを受賞している。(詳細は「資料編・各種受賞一覧」参照)



厚生大臣表彰後の祝賀会で田島所長(中央)と小山係長(その左)他血清検査スタッフ(昭和61年5月28日)



加藤十郎会長叙勲並びに県勢功労者表彰祝賀会(平成5年6月)



八木義郎会長叙勲祝賀会(昭和60年11月26日)